

兄弟の共存共生と妻殺し

— 武者小路実篤『愛慾』における家父長的価値観 —

楊 琇 媚

一、はじめに

『愛慾』は大正十四年十一月に執筆され、十五年一月に『改造』に発表、後に改造社から刊行された戯曲である。ある兄弟と一人の女性をめぐる三角関係を描いたこの作品は、弟が妻であるその女性を殺してしまうという結末に至る物語である。本多秋五氏が「猜疑や嫉妬や憎悪など、人間心理の暗い面をこれほど迫真的に描いた作品は、作者の全著作中にも類例がない」と述べている通り、武者小路文学の中では、「人殺し」を題材とした異色の作品であると言つてよい。また、昭和二十五年調和社より刊行された改訂版の帯に、『愛慾』と『その妹』はこの作者の現代物の内で、世界的戯曲とまで世評高き作で、最も血みどろの作である。共に生きぬこうとする不幸な人の話である」と書かれているように、「大正文学の傑作のひとつとして指を屈することが定説となっている」¹⁾。

この作品には発表当時から高い評価が与えられているのだが、それにもかかわらず、作品分析を行った先行論文が殆ど見当たらない。その理由の一つとして、やはり「生命賛仰の共生社会」²⁾と見られる

「新しき村」(大正七年創設)の創始者でありながら、「人殺し」を描いたこの作品を、武者小路文学の中で、どう位置付けるべきかが難問であるからだと考えられる。

本稿では、まず兄弟である信一と英次は敵対しながらも、実は相互に共存共生の意識を抱いていることを明らかにし、弟の妻である千代子が殺されなければならなかった必然性を考察していくこととする。そして、こうした特異な作品を書いた作者の心理的な背景にも注目しながら、武者小路文学における本作品の位置付けを行つてみたい。

二、兄弟の共存共生

兄の信一は「一代の人気役者」であるのに対して、弟の英次は「セムシ」であり、ものにならない絵画きという設定である。英次は信一に対して常に劣等感や嫉妬心を感じているのだが、同じ芸術家同士であるという点において、英次は兄の芸を尊敬もしている。また、信一も「僕はお前を尊敬してゐる。二人は一面敵かも知れないが、

一面は実に尊敬しあふ。この上ない兄弟だと思つてゐる」と言つており、二人は敵対関係にありながらも、兄弟の絆も確実に存在していることが確認できる。

女性には不自由をしない信一とは異なり、英次は自分が女性に好かれたい人間であると思つている。だからこそ、「唯一の女」である千代子が現れると、英次は彼女がかつて兄と愛し合つていたことも目に入らなくなつてしまい、夫婦にまでなつてしまった。しかし、自分に自信のない英次は常に兄と妻の關係に対して疑いの念を抱いてしまうようになる。

嫉妬と憎悪に悩まされ苦しんでいる英次は、解決策として三人のうちの誰かを殺そうと考え始めた。そして、兄を殺すことができない理由として、有名人である彼を殺せば犯人が自分であることがすぐに分かつてしまうからだと言つている。しかし実際には、英次にとつて兄は必要不可欠な存在であり、殺すことなどできないのではないかと考えられる。

英次と信一は兄弟であり、芸術家同士でもある。二人はお互いに尊敬し合つており、特に信一は未だものにならない英次の才能を認め、いつか有望な絵画きになると信じており、弟への期待が大きいのであろう。

また、千代子が現れる以前から、英次は兄に対して仕事の上での嫉妬を感じてはいたものの、仕事熱心な英次にとつてはその嫉妬心が逆に良い刺激剤になつていてのではないかと考えられるし、信一が良きライバルであることに間違いはないであらう。一方で、英

次の才能を認め続けている信一とは対照的に、千代子は夫婦喧嘩の際に英次の画に対して「一十十銭にだつて売れる時は来ないと私は覚悟をもうきめてみます」などと言つて、英次の仕事に対して不満を示しており、彼女はむしろ英次の仕事に対する障害となつていくようにも思われる。

このようにみえてくると、英次の仕事にとって、千代子の存在よりも信一の存在の方が意義が大きいと言える。また、千代子の存在は英次にとつて兄に対する嫉妬心の原因にもなつていて、彼女の死がある意味で英次の葛藤の救いになつたことも考えられる。要するに、英次にとつて信一の存在は絶対的なものであり、彼は少なくとも無意識下では兄と共存することを望んでいるのである。

一方、信一の場合を見てみると、彼は過去の女である千代子に対して、自分の命を捨てても千代子が生きられるように願う言葉を繰り返し言い続けてきた。しかし、この発言の背後に隠された信一の本音とは一体どのようなものであろうか。

信一は英次に「僕は千代子さんを愛してゐないとは云はない。しかしそれ以上、千代子さんの死ぬことを恐れてゐたのだ。(中略)千代子さんをお前に世話したのは俺だから、俺に責任があるやうな気がするし、それにお前を人殺しにするのはいやだからね」と言つて、いることから分かるように、千代子が死ぬことを恐れているのは、彼女への愛情というよりも、彼女を弟に世話したという自己責任意識のためであることが窺える。また弟が「人殺し」となれば、自分の名誉にも傷がつくことになつてしまう。このように、名誉を重視

する彼は、悲劇が起こらないように懸命に気を配っていたが、ついには英次によって千代子の命が奪われるというクライマックスを迎えるに至ったのである。

千代子の死が明らかにされていない段階において、信一はたとえ英次が千代子を殺したとしても、自分は弟の人生を「人殺しとして葬りたく」はないと語っている。そして、千代子の死が明らかになると、「私達は生きてゆかなければなりません」と言いながら、自ら千代子の死骸を処理するなど、英次の罪を隠蔽する行動を取っていくのである。

こうして、信一は英次から如何に憎まれていても、名誉を第一に考えながら、弟を見捨てることなく、「弟だけでも助けてやります」と言つて、英次とともに生きていく姿勢を見せるのである。

以上見てきたように、信一と英次はお互いに衝突する場面などもあったものの、それぞれ共存共生していく意識を持っていることが確認された。また、事件を処理してくれた信一が、英次にとって命の恩人にあたるわけであるから、兄弟の間の大きな溝も、この事件を契機として、次第に埋められていくに違いない。こうして、千代子をめぐる英次と信一との間の亀裂は、彼女の死によって修復の方向に向かい始めるのであり、結局兄弟の絆が深まるというプラスの結末に至るのである。廣津和郎氏もこの点に注目しており、これこそが武者小路の「理想主義」であると賛辞を送り、次のように述べている。

この『愛慾』に現れたやうな思想は、武者小路氏の過去の作物のいろいろなものゝ中に散らばつてゐる。それが今度の作で結晶して示されたと云つていい。(中略)最後に妻を殺して卒倒してゐる主人公を、その妻を愛してゐる主人公の兄が、助けようとして、友人と共にこび出す光景は、武者小路実篤氏の理想主義が生み出した感動すべき場面だ。⁽⁵⁾

しかし、英次と信一における兄弟の絆という一面が強調されればされるほど、その反面における殺された千代子の運命の惨めさというものが一層際立つていくように思われてならない。次節では、見方を変えて千代子の場合を見てみたい。

三、家父長的価値観

千代子は英次に別れることを申し出たところ、命を奪われてしまったのである。殺した英次は罪を自白することもなく、それを知つた信一と小野寺も英次の犯罪の証拠隠滅を図ろうとした。『愛慾』が発表された九ヶ月後、すなわち大正十五年九月に、「愛慾後日譚」という副題を付けられた戯曲『ある画室の主』が同じく『改造』に発表された。『ある画室の主』の主人公である英次は、『愛慾』における英次の後の姿であると考えられる。そして、『ある画室の主』における英次は『愛慾』において「人殺し」という犯罪を犯したにもかかわらず、罪を償うこともないまま、逆に画が世間で好評となり、

二人の弟子さえ持つ立派な画家となっている。つまり、英次は千代子を殺した後でも立ち直り、「自己を生かす」ことができたという形になっているのである。

人を殺したものが法の裁きを受けないというのは、そもそも常識から逸脱したことである。ましてや、「人殺し」という罪を背負いながらも、出世することができたという設定の話には納得のできないものがある。

なぜ千代子は英次によって殺されなければならなかったのか。英次は殺人を犯した後も「自己を生かす」ことができたのに対して、なぜ千代子の「自己を生かす」ということだけが許されなかったのか。また、兄弟の絆が修復されたのに対して、殺された千代子の運命というのは一体どのようなものだったのか。これらの疑問を通して千代子の死ななければならなかった必然性を探ってみよう。

前にも少し触れたが、嫉妬と憎悪に苦しめられていた英次はそれを克服する方法として、千代子を殺すか、兄を殺すか、或いは自分を殺すかという方法を考え出したという。そして、「僕は自分の仕事のために死ねない」と、あくまでも仕事に拘り、自ら自分の命を断つことはできないことを明言する。一方兄を殺す場合には、兄が有名人であるため、殺したら犯人が自分であることがすぐにばれてしまうということ懸念している。千代子の場合も「あいつを失はずにあいつを殺すことが出来ない。そしてあいつなしには僕は生きられないもの、結局は彼女を殺してしまうことになるのである。このこ

とは以下のようなことを意味しているのではないかと思われる。

すなわち、自分や兄には仕事があるし、有望な人間であると信じているため、死ぬことはできない。一方、千代子は仕事もなく単なる夫に依存するだけの女性であるから、夫に必要とされる以外には、無価値に近い人間として見なされているのであろう。また、彼女は信一とは違って、行方不明になっても誰にも気付かれないであろうと考えているのではないか。このような英次の思考からは、かなりの男性優位の意識を読み取ることができる。

確かに、千代子が信一との曖昧な関係によって英次を苦しめ、彼に精神的な苦痛を与えたことは否定できないかもしれない。しかし同じように、英次も千代子を束縛し殺すと脅かしており、さらに千代子の「画が出来損なうとすぐ疳が起ります」という証言から見ると、妻の不倫が原因ではない場合にも、個人的な感情によって日常的に千代子に精神的虐待を与えていたことが推測できる。お互いに傷つけあうばかりの関係であるため、別れることが一番の解決になるのではないかと考えられるが、しかし英次には千代子を兄に奪われたくないという意識が存在するために、最終的には彼女を殺してしまつた。さらに、殺された千代子に対して英次は「お前は殺される資格のある奴だ。誰も俺のしたことを尤と思ふだらう」というような家父長的な発言をしており、あたかも不倫する妻は殺されるべきであるかのような自分の行為の正当性を主張している。

また、小野寺が信一に「死骸が出てもあなたは英次君を憎みませんか」と聞いた際、信一は「もしものがあれば弟だけでも助け

てやります」と答えており、それに対して小野寺は「それを聞いて安心しました」と言っている。さらに、千代子にとって唯一の味方であるはずの信一までもが、彼女が殺されたことが判明した時、もちろん悲しく思い泣き出しつつも、「まさかこんな馬鹿なこととはしまいと思つておりました。ですがやむを得ません。私達は生きてゆかなければなりませんから」と述べており、小野寺と協力して英次の罪を隠蔽しようとしたのである。結局、殺された千代子のことを不憫に思う人は一人もいなかったことになる。なお、もう一つ注意すべきことがある。それは、この劇が終わる直前のところで登場する、信一が千代子の死体を搬出する手伝いをしてもらう仲間たちや、殺人後に体調を崩した英次を診察するように頼まれた友人の医者などといった、いわゆる間接的共犯者たちの性別がすべて男性であることである。また作者がわざわざ「男」と書き添えていることも興味深いことである。

このように、「妻殺し」という殺人事件を契機に、男性の登場人物が一斉に團結するようになることの背景には、いかにも「構造的な力関係の不均衡」が存在しているように思われる。このことは、「夫と妻」や「男性と女性」との間での「構造的な力関係の不均衡」を物語っているのみならず、夫と妻／男性と女性という構造関係を悪用したふるまいでもあると言えよう。つまり、女性の運命を苛酷にしているのが男性を中心とする家父長制社会、文化だと言えるように、妻は家父長制社会における犠牲者であり、劣位集団に属している。この作品には、いわば男尊女卑という家父長的価値観が具現化

されていることが明らかになるのである。

だが、批評家たちは千代子の死に関しては全く目を向けようとせず、その一方で男性登場人物の間の関係ばかりを注目している。たとえば中川孝氏による論考^{〔8〕}の中には、以下のような宇野浩二氏の指摘が引用されている。

それは、英次に、いやがられたり、時には憎まれたり、軽蔑されたり、している、兄の信一も、友人の小野寺も、結局、英次を、しんそこから、愛しているからである。そうして、英次も、なんとかかんとか言いながら、この兄を、この友人を、心の中では、つよく、愛しているからである。／こういう、美しい、なんともいえぬ、美しい、『愛』を武者小路は、自分に、持っているから、こういう、世にもまれな、『愛』を、すこし理屈もいわずに、すぐれた脚本として、現わせるのである。つまり、武者小路でなければ、『愛慾』は、誰にも、書けないのである。

前節でも触れたが、信一と小野寺による英次の殺人を粉飾しようとする行動は、兄弟の絆の深さ、または男性同士の友情の深さを示すものであると読み取ることができると言える。しかし、極端に言えば、それは果たして千代子という女性の犠牲の上でしか成り立たないことなのであるか。先述したように、英次は千代子を殺したとしても、結局「自己を生かす」ことができたのであるから、結果的には千代子との愛情はまったく問題ではなかったことが窺われるし、兄弟の

絆を修復するため、或いは英次自身が生まれ変わるためには、妻である千代子は死ななければならない存在であったとも考えられる。これらのことを考慮すれば、家父長的思考に満ちた作品と言える『愛慾』において、千代子は単なる「贖罪のやぎ」に過ぎないのである。英次の罪が隠蔽されると同時に、千代子という女性の存在もまた消し去られてしまっているのである。作者をはじめ、男性批評家たちの批評も、本作品の持つ家父長的価値観を隠蔽しており、「女性の存在を蔑視する『性の政治』に加担している」と言えるのではないだろうか。

四、作品と作者の実生活との接点

周知の如く、武者小路は生涯前後して二人の妻（房子と安子）を持った。最初の妻である房子のことについて、また彼女と出会ってから、結婚に至るまでの経緯に関しては、明治四十五年の自伝小説『世間知らず』に詳しく書かれている。作中に描かれている房子をモデルにした女性主人公C子は、一本気で自己主張を持つ女性であると同時に、十九歳の時にすでに二人の子供役者と関係を持っており、また主人公とも二回目に会った時点で関係を持ってしまおうという性的に自由な女性である。こうした自由奔放な性格が、後年、「新しき村」が性的に自由な村であるという噂が流布する要因ともなったことが指摘されており、武者小路と房子が離婚することになった原因は彼女の不倫にあるという説が一般に広く認識されている。¹¹ さ

らに、房子は新しき村で日守、落合、杉山という、少なくとも三人の青年と交渉を持ったという事実も存在している。¹² このような房子の実像と一致するかのように、『愛慾』における千代子も「正直で単純で、明るくて、愛すべきところはあがるが、野放図の、放埒で、貞操観念の乏しい女性」¹³ として描かれている。そして、子供の出来にくい房子の不倫と、『愛慾』に描かれている不妊症の妻の不倫などといった類似点から考えると、この作品と作者の実生活には何らかの関連があるように思われるのである。¹⁴ よってここでは、武者小路の『或る男の話』¹⁵（大正十三年）と『一人の男』¹⁶（昭和四十二年）四十五年）に書かれている房子の不倫に直面した当時の心境を考え合わせながら、実生活と作品との接点を考察していきたい。

『一人の男』（九）によれば、房子とH（日守新一）の關係に疑惑を感じていた武者小路は、房子のことを「浮気の虫では僕に負けな女だった。僕の妻になるまでも、その方では信用されなかった」と述べており、房子の成長してきた環境に問題があったため、浮気の性質が育てられたのだと記している。また続けて、「僕を尊敬していたにしろ、僕だけで満足出来なかったのも無理はないと、小説家の僕には察する事が出来るのだ」と述懐している。「村に来て労働に疲れて毎日を過していた僕に満足出来なかったのは当然だ」と書かれていることから分かるように、房子の浮気な性格に加えて「新しき村」での生活が大変であったため、夫婦間には問題が生じていたことが想像されるのである。

房子の浮気な性格を承知しながらも、彼女を受け入れたが、次第

にそれが気になり始めたという武者小路の状況と、『愛慾』における千代子と兄の過去を知りつつも、彼女と結婚したが、次第にそれが我慢できなくなっていくという英次の状況には似通った部分を感じられる。特に「妻が僕に満足しない」という現実には迫られている点では両者は完全に一致している。

また『一人の男』(二二)では、日守が村を去った後、房子が一人で旅に出た時に、「房子の今度の旅行の目的はHに遭うためではないかという疑いであった。それで僕は房子を責めたい。房子は逢わないと僕に誓ったように思う。(中略)房子は逢わないと言ったが、僕にはそれを信じ切れなかった」と記しており、武者小路の房子と日守に対する猜疑心の存在が注目される。そして、房子が村に戻ったのち、神戸の「新しき村」の女性会員から「房子がHと逢った事だけが報告してあった」という手紙が武者小路宛てに送られてきた。

「この手紙は、書いた人が望んでいたか知らないが、二人の間に決定的な何ものかを残した事は事実だった」という武者小路の述懐からは、夫婦間に大きな溝ができており、房子に裏切られたことよって、お互いの信頼関係がすでに壊れてしまっていたことが察せられる。一方、『愛慾』の場合においても、英次の「嫉妬」や「憎悪」といった感情が増大していくきっかけとなった出来事が以下のように二つ描かれている。

一つは、妻が酒を買いに行く途中、兄と角で話している光景を英次が目撃してしまったことで、それを知らずにいる妻は「酒屋の上さんに話しこまれた」と嘘をついてしまった場面であり、もう一つ

は、小野寺が信一に依頼され、英次に引越しすることを勧めた場面である。

引越しをしたい願望が妻によって兄に伝わったのではないかと疑う英次は、小野寺に「夫婦なかに秘密があるのを君の前で知らせるのは不愉快だから」、「細君の心理を夫より他人の方が知つてゐると云ふことに平気になりたいと僕は思つてゐるのだ」と語っており、暗に妻に裏切られたという心情をもらすのである。

夫が妻に裏切られたという意識を持っている点で、作品と実生活には共通性が確認される。

次に、先にも少し触れたが、「新しき村」での生活が夫婦仲にもたらした影響について『或る男の話』では以下のような記述が見られる。

僕は文士の生活をつづけてゐたら房子を貞操ある妻にすることが出来たらう。それはいつでも二人一緒に居ることも出来、行きたくない所にはゆかずにすむから。だが新しき村の生活をすれば、さう嫉妬を露骨に出すわけにはゆかない。二人だけの生活は出来ないのだから、ねる時より他に二人だけの時間はない、そしてその時はつかれ切り、眠い頂上である。／＼だから村では夫婦の生活することは困難である。(八)

つまり、文士の生活をやめ、村での共同生活に入れば、夫婦水入らずの暮らしをすることはできなくなる。ところが、房子はそのこ

とに対して満足できないため、村の他の男性との噂が立ったとしても無理のないことであろうと考えているのである。こうした武者小路の文章から考えると、当時の彼は仕事と愛情を両立させることができず、心の中で葛藤していたことが推察される。このような心境が『愛慾』という作品においても反映されているように思われるのである。

千代子と信一の間を疑う英次は「妻が僕に満足しないと云ふのは当然すぎることだ」と語り、自信を喪失した様子を見せている。そして、一旦家を出ていた妻が戻ってきた後の、妻の「主人がよるこんでくれたので、私は生きかへつたやうな気がしましたよ」という言葉に対しては、「俺も生きかへつたやうな気がしたよ。(略)そこからは、英次にとって仕事と愛情というものが、両立できない存在であることが考えられる。実際、英次は仕事のことを非常に気にしており、仕事で努力していくためには妻のことをなるべく気にかけないようにと、常に自分に言い聞かせている。しかしその一方で、彼は妻と兄のことを考え始めると、気になって仕事を手につかない状態に陥ってしまうのである。英次のこのような仕事と愛情の間をさまよう心境は、おそらく上述した武者小路の房子の不倫をめぐる当時の心境が反映されたものではないかと思われる。

もう一つの例を挙げてみる。『一人の男』には、次のような記述がある。

房子と結婚すれば当然の結果として今度の事も覚悟しなければならぬ事は、僕は知りすぎていた。(中略)自分の妻の行動を夫として責任を持ちすぎたり、監督したりする事もある程度以上はするべきものではないし、又不可能な事を僕は知っている。しかし性的にも妻を満足させる事が出来なかつたのでは、名誉な事とは思えない気がするのは、事実であつた。(二十二)

この事実に関連して、『愛慾』の方を見てみると、英次は「自分のわきに居たくない人間をわきに居させやうとは思はない」、「お互に生てゐるのがいやになる程束縛する必要があるとは思はない」と言いながらも、結局は千代子を監視し、自由と生きる喜びを奪うような行動に出てしまった。ここからは、英次の葛藤を想像することができる。そして、千代子が殺される直前に作者が彼女に言させた「妻は夫のものなの。妻は夫の奴隷で、夫が殺してもいゝの。又夫が妻を箱のなかに押しこんで、逃げると殺すなどと云つてそれが夫の権利のやうに思つてゐるの」という台詞、また英次と信一が衝突した場面で信一に言させた「自分を愛しない女を自分のわきにカン禁したことはない。それこそ一番、男らしくないことだと思つてゐるよ」といった台詞からは、作者が英次のこうした行為を理不尽なものだと分かつており、分かつていながらも、英次が千代子を殺してしまふという設定を行ったことが明らかとなるのである。すなわち、現実では解決できない房子との問題を、武者小路はこの作品の中で千代子殺しという代償行為で解決させた、と考えることも可能なので

はないだろうか。このことは、英次の葛藤と同様に、武者小路自身も愛情問題に対して葛藤していたことを意味しているのではないだろうか。要するに、千代子に「自己を生かす」権利を与えることができていることか、英次に彼女の人生を奪う権利がないことを知りながらも、彼女が殺されてしまうという矛盾した設定を行うことは、武者小路自身が自分の愛情問題を明確に整理できておらず、位置づけることができていないという当時の心境の具現化であるように思われるのである。

五、おわりに

以上、本作品と武者小路の実生活との接点を考察してみた。「愛慾」は内容的には武者小路の実生活に即して書かれたものではないが、少なくとも作中における英次の気持ちには、房子の不倫事件をめぐる武者小路自身の心境が反映されていることが明らかになったものと思われる。

本来、武者小路の作品には、登場人物にどんな苦難が発生しても、最後には必ずなんらかの形で彼らが自己を生かしていく結末に至るという特徴が見られる。ところが、『愛慾』においては、千代子は殺されることで、「自己を生かす」ことがまったく実現できておらず、上述した作者の作品の特徴からは、極めて逸脱した存在となつていくことが分かる。また、武者小路の作品に本来よく見られる説教的な台詞が、本作品においては殆ど見当たらないことも注目に値する。

そこから逆に、作者の生々しい気持ちや作中に現れているようにも感じられるのである。つまり、英次の嫉妬や憎悪などといった真に迫った描写、また千代子の死という設定には作者の本音が露出しており、武者小路の作品に共通する家父長的価値観が現われていると同時に、作者の房子の不倫をめぐる葛藤が強い影響を与えていると思われる。おそらく武者小路は房子の不倫事件を脳裏に思い返しながら『愛慾』を書いていたのではないだろうか。このように見ると、『愛慾』はまさしく武者小路自身をめぐる深刻な心理劇だと位置づけてもよいのではないかと思われる。

※ テキストの引用は、小学館版『武者小路実篤全集第六卷』（昭和六十三年十月）による。

注（1）本多秋五「武者小路実篤」『日本文学小辞典』（新潮社、昭和四十三年一月）、引用は『本多秋五全集第十一卷』（善柿堂、平成八年五月）による。

（2）武者小路辰子「解題」『武者小路実篤全集第六卷』小学館、昭和六十三年十月

（3）中川孝『武者小路実篤―その人と作品の解説』（皆美社、平成七年一月）

（4）大津山国夫『武者小路実篤研究―実篤と新しき村―』（明治書院、平成九年十月）

（5）廣津和郎『愛慾』と『人を殺したが…』、『新潮』大正十五年二月

（6）ジュディス・フェツタリー氏はその著書『抵抗する読者』の中で、「文学は政治的である」、「アメリカ文学は男の文学である」、「アメリカは女であり、アメリカ人であることは男であることを意味する。そしてもっとも重要なアメリカ的経験は、女に裏切られることである」などといった概念を提示しており、一九、二〇世紀にアメリカ人男性が書

いたいくつかの作品を対象に分析を行っている(鶴殿えりか・藤森かよこ訳『抵抗する読者—フェミニストが読むアメリカ文学』ユニテ、平成六年五月)。このフェンタリー氏の『抵抗する読者』を援用し、千種・キムラーステイブン氏は、『范の犯罪』(志賀直哉)と性の政治で、志賀の作品が実に政治性に富んでいることを指摘している(江種満子他編『男性作家を読む フェミニズム批評の成熟へ』新曜社、平成六年九月)。「范の犯罪」と同様に、『愛慾』でも妻を殺した夫が結果的に罪に問われていないという類似性から、千種氏のその見方は『愛慾』においても有効であると考えられる。よってここでは、そのような見方に倣って、本作品に現れている「性の政治」に注目していきたい。

(7) キムラーステイブン氏によれば、「構造的な力関係の不均衡とは、一口にいえば、個人の恣意では容易に変更できない社会的構造に根ざした不均衡な力関係をさし、それは資本家と労働者の間だけではなく、北と南、白人と非白人、男性と女性、夫と妻、親と子、そして青年・壮年者対老人、健康者と障害者などの間にも存在している。ただし、その社会で優位な位置にある集団のイデオロギーが表明されている時には、それは無色透明で政治性を欠くようにみえがちである」という。

(同前)

(8) 注3に同じ

(9) 注7に同じ

(10) 注4に同じ

(11) 阪田寛夫氏によれば、房子が落合に出会ったと同時に、武者小路も安子に出会ったが、「先ず燃えはじめたのは房子と落合貞三の間だった」。(『武者小路房子の場合』新潮社、平成三年九月)また、武者小路と別れた理由について、房子は次のように述べている。「先生と別れたのはね、安子さんに子供ができたからなのよ。この村で二人の子供を産んだの。私が体をこわして福井に帰っている間に、安子さんに実篤先生の御世話をお願いしてねんごろになっちゃったのね。あの方はもともと行儀見習いで来ていた人だから、出世したのよね。子供が出来た方が勝ちだもの。女は子供が産めないと失格ね。」(吉田隆「武者小路房子の最期」『新潮』平成四年十月)

(12) 奥脇賢三『検証「新しき村」』(農協漁村文化協会、平成十年五月)。

また大津山国夫氏によれば、日守は大正七年に入村しており、「本名は守山一雄、家出して身を隠していたらしく、武者小路に日守新一の通称をつけてもらった」が、翌年すなわち大正八年六月に離村したという(同前)。そして、武者小路の自伝である『一人の男』(一一)では、日守の離村の原因は房子との噂が広まったため、村に居にくくなると書かれている。同じく大津山氏の調査により、落合(貞三)は大正九年に入村し、杉山(正雄)は十一年に入村したことが分かる。

(13) 注5に同じ

(14) その上、本多秋五氏は『愛慾』について、「突然変異的な作品」であると述べており、作者の執筆動機に関しても「別に準備もなにもなしにフツと書いたというふうには言っていないと思います、けっきょくあれは『新しき村』の三角関係だか四角関係だかの体験、あれが飛び出したものじゃないかと思えます」という推測を行っている。(本多秋五他《座談会・近代日本文学史》16『武者小路実篤ほか—白樺派の文学(3)—』『文学』岩波書店、昭和三十七年五月)

(15) 小田切進氏によれば、この作品は「房子、安子にかかわる部分を拡大した作品なので、或る男」に直接つながる連作の一つと見られる」ものであり、自伝小説『或る男』(大正十年)の続篇に相当するものである。(「解説」『武者小路実篤全集第五卷』小学館、昭和六十三年八月)本文の引用は『武者小路実篤全集第五卷』(同前)による。

(16) 渡辺貢二氏によれば、この作品は「実篤が三三歳ではじめた新しき村の生活から、八三歳の時に迎えた新しき村の五十年間までを、一九六七年(昭和四二)一月から、一九七〇年(昭和四五)一二月までの四年間、雑誌『新潮』に連載して完結した自伝小説である」。(「解説」『武者小路実篤全集第十七卷』小学館、平成二年六月)本文の引用は『武者小路実篤全集第十七卷』(同前)による。

(17) 阪田氏による次の見解がある。「二人の間に決定的な何ものかを残した事は事実だった」と書き、「この事は安子(引用者註・のちの武者小路安子)に僕が出逢う一、二年前の話である」とわざわざ書き添えた。ここまでは相手を庇って筆を抑えていたけれども、今のうちに本当のことを言っておこうという姿勢である。それはまたのちに「四

角関係」と言い立てられた事件の原因と責任について、房子の浮気が
先ず夫婦の信頼関係をこわしたのだと、読者に明示してもらっているのだ
た。」(同前)

【付記】

本稿は、2004年日本女性学会全国大会における口頭発表に基づくも
のである。席上、諸先生方より貴重な御指示を賜った。心より御礼を申し
上げたい。

(よう・しゅうび、広島大学大学院博士課程後期在学)